

### 【3】 「由旬」の長さをインドの単位で示す資料

[1] 古代インドの長さの尺度は、由旬 (yojana)、俱盧舍 (krośa) = gavyūti = goruta、弓 (dhanu)、肘 (hasta)、揲手・指尺 (vitasti)、指 (aṅgula・aṅguliparva) 等が用いられている。

[1-1] これを伝える文献は多い。これを表にして示すと以下のようになる。仏教文献、ジャイナ教文献、ヒンドゥー教文献の順に、またその中では一応成立順を念頭において配列してみたが、それほど厳密なものではない。なおここでは微小単位については省略し、これについては巻末に附録として示した。

文献名	1 yojana=	1 krośa= 1 gavyūti=	1 dhanu=	1 yojana=	1 yojana=
『十誦律』卷8 (1)		摩伽陀 500 弓 北方 1,000 弓			
『僧祇律』卷9 (2)	4 拘盧舍	2,000 弓	5 肘	8,000 弓	40,000 肘
『起世因本經』卷4 (3)		1,000 弓	4 肘		
“Lalitavistara” (4)	4 krośa	マガダ 1,000dhanu	4 hasta	4,000 dhanu	16,000 hasta
“Śārdūlakarṇa- avadāna” (5)	マガダ 4 krośa	1,000 dhanu	4 hasta	4,000 dhanu	16,000 hasta
『方広大莊嚴經』卷4 (6)	4 拘盧舍	1,000 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『仏本行集經』卷13 (7)	8 拘盧舍	1,000 弓	4 肘	8,000 弓	32,000 肘
『大毘婆沙論』卷136 (8)	摩揭陀 8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
	北方 8 俱盧舍	1,000 弓	4 肘	8,000 弓	32,000 肘
『雜阿毘曇心論』卷2 (9)	摩竭提 8 拘屢舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
	北方 8 拘屢舍	1,000 弓	4 肘	8,000 弓	32,000 肘
『俱舍釈論』卷9 (10)	8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『俱舍論』卷12 (11)	8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『阿毘達磨順正理論』 卷32 (12)	8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『阿毘達磨顯宗論』卷17 (13)	8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『根本有部律』卷21 (14)	8 拘盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
同 卷24 (15)	4 拘盧舍	500 弓		2,000 弓	

由旬 (yojana) の再検証

『大唐西域記』巻2 <sup>(16)</sup>	8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『俱舍論記』巻12 <sup>(17)</sup>	8 俱盧舍	500 弓	4 肘 (1 肘 = 1 尺 6 寸)	4,000 弓	16,000 肘
『法苑珠林』巻3 <sup>(18)</sup>	8 俱盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
『翻譯名義集』巻3 <sup>(19)</sup>	8 拘盧舍	500 弓	4 肘	4,000 弓	16,000 肘
“Abhidhānappadīpikā” <sup>(20)</sup>	4 gāvuta				
『清浄道論』 <sup>(21)</sup>	4 gāvuta (kosa)	1,000 弓		4,000 弓	
“Trailokyadīpikā, Trailokyasāra” <sup>(22)</sup>	4 gavyūta	2,000 dhanu		8,000 dhanu	
“Arthaśāstra” <sup>(23)</sup>	4 goruta	2,000 dhanu	4 aratni (hasta)	8,000 dhanu	32,000 hasta
“Mārkaṇḍeyapurāṇa” <sup>(24)</sup>	4 gavyūti	2,000 dhanu		8,000 dhanu	
“Brahmāṇḍapurāṇa” <sup>(25)</sup>	4 gavyūti	2,000 dhanu		8,000 dhanu	

- (1) 後秦・弗若多羅共羅什訳。「尼薩耆波夜提」第26において、「阿練兒処」の解釈中に述べられたもの。「阿練兒処者、去聚落五百弓。於摩伽陀国是一拘盧舍、於北方国則半拘盧舍」とする。(大正23 p.057中)
- (2) 東晋・仏陀跋陀羅共法顯訳。「尼薩耆波夜提」第16中の「若比丘行道中得羊毛欲取。是比丘得自手取至三由延。若過三由延担者、尼薩耆波夜提」中の「由旬」の語句解釈として述べられたもの。「五肘弓。二千弓名一拘盧舍。四千弓半由延。八千弓一由延」とする。(大正22 p.309下)
- (3) 隋・瞿曇僧伽提婆訳。四大洲の山の高さにはさまざまなものがあることを示したもの。「去地令高。一俱盧舍举已能令分散破壊。乃至二三四五六七俱盧舍。地既攀举已、悉能令其星散破壊、乃至高一踰闍那。地攀举星散破壊如前、如是二三四五六七踰闍那」とし、俱盧舍に「四肘名一弓、千弓名俱盧舍」と挾註する。(大正01 p.385上)
- (4) 外蘭訳 p.912
- (5) 岩本裕「古代インドの尺度」(『科学史研究』39、1956)によった。ここでは3世紀以前の成立とされている。pp.021~022
- (6) 唐・地婆訶羅訳。太子がよく計算ができたことを述べる中で、「凡七極微塵成一阿耨塵、……兩揲手成一肘、四肘成一弓、千弓成一拘盧舍、四拘盧舍成一由旬」とする。(大正03 p.563中)
- (7) 隋・闍那崛多訳。シチュエーションは上に同じ。「凡七微塵成一窠塵、……二尺一肘、四肘一弓、五弓一杖、其二十杖名为一息、其八十息名拘盧奢、八拘盧奢名一由旬」とする(大正03 p.710上)。この通りに解釈すると1拘盧奢は8,000弓となり、1由旬は64,000弓になる。これでは途方もない数字となるので、「八十息」を「十息」の誤りと解して1拘盧奢=1,000弓とした。ただし後に触れる“Abhidhānappadīpikā”は、7 ratana (肘) = 1 yaṭṭhi、20 yaṭṭhi (杖) = 1 usabha、80 usabha = 1 gāvuta、4 gāvuta = 1 yojanaとしているから、「八十息」は単なる誤植ではないかもしれない。註(20)参照。

- (8) 五百大阿羅漢等造、唐・玄奘訳。時間・空間の単位を説明するところで、「七極微成一銅塵、……二十四指節成一肘、四肘為一弓、去村五百弓、名阿練若處、從此已去名迦遠處。則五百弓成摩竭陀國一俱盧舍、成北方半俱盧舍。所以者何。摩竭陀國其地平正去村雖近而不聞聲、北方高下遠猶聲及。此故北方俱盧舍大。八俱盧舍成一踰繕那。瞻部洲人身長三肘半、或有過者。毘提訶人身長八肘、……」(大正27 p.702上)
- (9) 法救造、宋・僧伽跋摩等訳。時間・空間の単位を説明するところで、「七極微成一阿耨、……二十四指為一肘、……彼數即身量四肘為一弓、去村五百弓名為空處、是摩竭提一拘屢舍、北方名拘屢舍半。……八拘屢舍名一由旬。……閻浮提人長三肘半或四肘」(大正28 p.886下)
- (10) 婆薮判豆造、陳・真諦訳。時間・空間の単位を説明するところで、「七隣虛為一阿耨、……二十四指為一肘、四肘為一尋、亦名一弓、五百弓為俱盧舍、亦名村亦名阿練若。偈曰、此八一由旬。釈曰、此八俱盧舍為一由旬」(大正29 pp.219下~220上)
- (11) 世親造、唐・玄奘訳。時間・空間の単位を説明するところで、「謂七極微為一微量、……二十四指橫布為肘、豎積四肘為弓。謂尋。豎積五百弓為一俱盧舍。一俱盧舍許是從村至阿練若中間道量。說八俱盧舍為一踰繕那」(大正29 p.062中)
- (12) 衆賢造、唐・玄奘訳。時間・空間の単位を説明するところで、「謂七極微為一微量、……二十四指橫布為肘、豎積四肘為弓。謂尋。豎積五百弓為一俱盧舍。毘奈耶說、此是從村至阿練若中間道量。說八俱盧舍為一踰繕那」(大正29 pp.521下~522上)
- (13) 衆賢造、唐・玄奘訳。時間・空間の単位を説明するところで、「謂七極微為一微量、……二十四指橫布為肘、豎積四肘為弓。謂尋。豎積五百弓為一俱盧舍。毘奈耶說、此是從村至阿練若中間道量。說八俱盧舍為踰繕那」(大正29 p.855中)
- (14) 唐・義淨訳。「自擔負羊毛學處第16」の踰繕那の解説として、「謂七極微成一微塵、……二十四指成一肘、三肘半成一尺、四肘成一弓、五百弓為一拘盧舍、八拘盧舍為一踰繕那。若有七村、一一村間有一拘盧舍」(大正23 p.739上)
- (15) 「阿蘭若六夜學處第27」の阿蘭若の解説として、「在阿蘭若住處者、去村五百弓、有一拘盧舍名阿蘭若處。四拘盧舍名一踰繕那。從七極微至踰繕那、有十八種差別。如前廣說」(大正23 p.756下) これによれば、1由旬=2,000弓となるが他に例がなく、『根本說一切有部律』には(14)のように4,000弓とする文章もあるので、これが正しいものとする。
- (16) 「夫數量之稱謂踰繕那。踰繕那者、自古聖王一日軍行也。旧伝一踰繕那四十里矣、印度國俗乃三十里、聖教所載唯十六里。窮微之數分一踰繕那為八拘盧舍。拘盧舍者、謂大牛鳴聲所極聞稱拘盧舍。分一拘盧舍為五百弓、分一弓為四肘、分一肘為二十四指、……細塵七分為極細塵」(大正51 p.875下)
- (17) 唐・普光述。「分別世品」中の極少量の解説中で、「若依此間計一踰繕那成里數者、謂一肘有一尺六寸、四肘為一弓、一弓有六尺四寸、五百弓為一俱盧舍、計五百弓有三千二百尺。八俱盧舍為一踰繕那。計八俱盧有二万五千六百尺。以五尺為一步計有五千一百二十步、以三百六十步為一里、計有一十四里余八十步為一踰繕那。言阿練若者、阿之言無、練若名喧雜」(大正41 p.193上)とする。
- (18) 唐・道世撰。身量部に『雜心論』を引用して、「七極微成一阿耨池上塵、……二十四指為一肘、四肘為一弓、去村五百弓為一拘屢舍、八拘屢舍名一由旬」とする。(大正53 pp.285下~286上)
- (19) 宋・法雲編。踰繕那の項の解説。『業疏』を引用して「此無正翻。乃是輪王巡狩、一停之舍。猶如此方館驛」とし、続いて『西域記』を引用して「夫數量之稱謂踰繕那。旧曰由旬、又曰踰闍那、又曰由延。皆訛略也。踰繕那者、自古聖王一日軍行也。旧伝一踰繕那四十里、印度國俗乃三十里、聖教所載唯十六里」という。また『大論』を引用して、「由旬三別。大者八十里、中者六十里、下者四十里。謂中辺山川不同、致行里不等。窮微之數分一踰繕那為八拘盧舍。

分一拘盧舍為五百弓、分一弓為四肘、分一肘為二十四指、……細塵七分為極細塵」とする。しかし「窮微之數分」以下は『西域記』の分と同じであるから、この引用であろう。(大正54 p.1107中)

(20) W.Kirfel “Die Kosmographie der Inder” (Leipzig, 1920) p.335によった。W.Subhūti 長老によって編集されたパーリ語辞書で、1865年に出版された。水野弘元『パーリ語文法』(山喜房仏書林、1965補訂版) p.211参照。ここでは次のようにされている。

1 yojana=4 gāvuta (原文は gavūta とされているが、誤植であろう)

1 gāvuta=80 usabha

1 usabha=20 yaṭṭhi

1 yaṭṭhi=7 ratana

1 ratana=12 aṅgula

1 aṅgula=7 dhaññamāsa

これによれば、1 由旬は44,800 ratana (肘) となる。Childers の “A Dictionary of the Pali Language” の ‘yojana’ の解説もこれにしたがっている。

(21) “Visuddhimagga” の国訳 (南伝62 p.254) で、「1 コーサ半 ‘diyaddhakosa’」に (1,500弓) と割註されているのに依った (“Visuddhimagga” p.127)。しかし1 kosa あるいは1 gāvuta が1,000弓とされているパーリ文献は見いだされない。ちなみに Margaret Cone の “A Dictionary of pāli” (PTS, 2001) の ‘kosa’ の項では、a measure of length (500 bowlengths) と解説されている (p.739)。ただし “Dhammapada - aṭṭhakathā” では1 yojana は4 gāvuta とする。(vol. II p.013)

(22) W.Kirfel “Die Kosmographie der Inder” (Leipzig, 1920) p.337にジャイナ教の文献として紹介されている。

(23) R.P.Kangle “The Kauṭīliya Arthaśāstra” (Bombay, 1960) Part I p.071および V.N.S.Venkata Nathacharya “Kauṭīliya Arthaśāstra of Śrī Viṣṇugupta” p.115では 「2,000 dhanu が1 goruta、4 goruta が1 yojana (dvidhanussahasraṃ gorutam, caturgorutam yojanam)」とする。また中野義照訳 (生活社、1944) は Shamasāstry 本 (Mysore, 1924) を底本として同じく1 goruta を2,000 dhanu とするが、前掲の Basham および Kirfel の引用は1,000 dhanu としている。岩本裕「古代インドの尺度」(『科学史研究』39、1956) p.021 も『アルタ・シャーストラ』の説として1 goruta=1,000 dhanu としているが、これらの拠り所としたテキストは知られない。管見するところのテキストはすべて1 goruta=2,000 dhanu とするからここではこれを取る。

(24) W.Kirfel “Die Kosmographie der Inder” p.332によった。

(25) 同上

[1-2] 以上を整理してみると、2つのタイプに分類できる。すなわち、1つは1 由旬が dhanu (弓) の単位にして4,000 dhanu とするものであり、もう1つは8,000 dhanu とするものである。

(1) 4,000 dhanu とするもの

1) 4 krośa × 1,000 dhanu とするもの

Lalitavistara (マガダ)、方広大莊嚴經、Śārdūlakarṇa-avadāna、清淨道論

2) 8 krośa × 500 dhanu とするもの

十誦律 (マガダ) <sup>(1)</sup>、大毘婆娑論 (マガダ)、阿毘曇心論 (マガダ)、

俱舍積論、俱舍論、順正理論、顕宗論、根本有部律、大唐西域記、俱舍論記、法苑珠林、翻譯名義集

(2) 8,000 dhanu とするもの

1) 4 krośa × 2,000 dhanu とするもの

僧祇律、Trailokyadīpikā, Trailokyasāra, Arthasāstra, Mārkaṇḍeyapurāṇa, Brahmaṇḍapurāṇa

2) 8 krośa × 1,000 dhanu とするもの

十誦律（北方）<sup>(1)</sup>、仏本行集経、大毘婆娑論（北方）、雑阿毘曇心論（北方）、以下の論述では便宜的に、前者を「小由旬」と称し、後者を「大由旬」と称することにする。

(1) 十誦律の定義は拘盧舎までで、由旬まで明示していないが、4 krośa × 500 dhanu の組み合わせは例がないのでこのように理解した。

[2] 上記資料について若干の考察を加えてみよう。

[2-1] 『十誦律』『大毘婆娑論』『阿毘曇心論』などでは8,000 dhanu の大由旬とするものは「北方」、4,000 dhanu の小由旬とするものは「マガダ」とするから、地方によって単位が違ったものであろう。これらは説一切有部系の文献であって、ここにいう北方は彼らの本拠があったカシミールなどインドの西北部を呼ぶものであるかもしれない。“Lalitavistara”と『仏本行集経』は同系統の文献であるはずであるが、前者は小由旬で、後者が大由旬であるのは奇妙である。

[2-2] カニンガムは現代のインドには「小コス」と呼ぶべき長さ、「大コス」と呼ぶべき長さが用いられていることを紹介している。しかし前者は北インドとパンジャーブ地方で用いられ、後者はガンジス河両岸地方で用いられているとしているから、用いられている地域は説一切有部系の文献の伝えるところとは正反対である。

[2-3] 前項の註に記したように、管見するところの“Arthasāstra”（『実利論』）のテキストは1 goruta を2,000 dhanu とするものばかりである。これによれば1由旬は8,000弓となるから、“Arthasāstra”は「大由旬」派であったことになる。しかしBashamを初めとしてKirfelや岩本裕氏などは“Arthasāstra”は1由旬=1,000 dhanu とするとしている。そこでBashamも「2種のyojanaがあった」とするのであるが、これら1,000 dhanu とする著作は例外なくどのテキストに拠ったかを明らかにしていないので確認できない。

もし1 goruta を2,000 dhanu とするテキストを信頼するとすると、マウリアの宰相であったカウティリヤの著作になる、したがってマガダの習俗を伝えるものと考えられる“Arthasāstra”は「大由旬」説を採っていたことになる。これは先の『十誦律』『大毘婆娑論』『阿毘曇心論』による伝承と反することになる。しかしその拠り所とするテキストは不明であるものの1 goruta を1,000 dhanu とする説も強く、もしこれを採るとすれば、これは「小由旬」となる。したがって“Arthasāstra”については早急な結論を導き出すことは危険である。

[3] krośa 以下の単位では、『僧祇律』のみが1 dhanu を5 hasta とするが、これは特異な伝承であり、その他の文献では全て1 dhanu は4 hasta であるから、誤伝と考えて差し支えないであろう。そうだとすれば、『僧祇律』はすなわち4拘盧舎×2,000弓×4=32,000

hasta が1由旬となり「大由旬」派に属することになる。

[4] 以上のように、古代インドにおいても由旬の長さに地域間の相違があったとすれば、釈尊が活躍された仏教中国や、原始仏教聖典が用いていた由旬はどちらであったかが問題となる。常識的に考えれば、釈尊の主な活動地はマガダであり、コーサラも言語としてはマガダ語が用いられていたというから、舎衛城もマガダ文化圏に属していたと考えてよいであろう。とするならば、仏教文献のいうところにしたがえば、仏教中国で用いられていた由旬は「小由旬」ということになる。

[5] 由旬の基礎となる hasta などが、度量衡の単位としてどれだけの長さであるかもはっきりしない。hasta 以下の単位も問題となるが、計算上は hasta が適当な単位であると思われるので、しばらく hasta について考えてみたい。

[5-1] hasta は「肘」であり英語の cubit に相当する。cubit は肘から中指の先までの長さである<sup>(1)</sup>。

『大毘婆娑論』『根本有部律』『阿毘曇心論』等では、閻浮提人の身長は3肘半あるいは4肘とされている。仮に当時のインド人の身長が165 cmであったとすると、1肘の長さはつぎのようになる。

$$165 \text{ cm} \div 3.5 = 47.14 \text{ cm}$$

$$165 \text{ cm} \div 4 = 41.25 \text{ cm}$$

(1) Monier は hasta を ‘the fore-arm (a measure of length from the elbow to the tip of middle finger=24 Angulas or about 18 inches)’ とする。英和辞書によると ‘fore-arm’ は前腕（ひじから手首まで）とするのに、( ) 内の解説は異なるわけである。Macdonell は ‘as a measure=fore-arm or cubit (about 18 inches)’ とする。定方は肘を「腕かいな、すなわち指の先端から肘のところまでです」という。

[5-2] 『俱舍論記』では1肘=1.6尺とする。唐の小尺の1尺=24.5 cmを採れば<sup>(1)</sup>、1 hasta は39.2 cmとなる。

(1) とりあえず森鹿三氏説によった。詳しくは【4】－【8】参照。

[5-3] 図像学上では1 hasta は18インチとされているようで、Prasanna Kumar Acharya “A Dictionary of Hindu Architecture” (London, 1934) p.742 では「通常24指または18インチ」とされている。

また逸見梅栄『印度に於ける礼拝像の形式研究』（財団法人東洋文庫、1935）pp.027～033 は次のようにいう。「印度の度量制は極めて複雑にして了解し難きものなり。その理由とするところは、度量を誌す文献の間に各々単位名称の相違あると共に各単位間の倍数関係も一致せざるものあるに依る。……度量の単位名称を等しくするも計量せらるべき物の種類に従い実際の量を異にする。即ち、尊像の1肘と距離の1肘とは長さの量に於て、必ずしも一致しない。正確なる度量の制度未だ成立せざりし原始時代にありて、物の長さを計るに、自己の手足を以て量器とするは、最も軽捷にして而も、比較的正確を期し得たるが故に、何れの国の度量も、これを基本として発達したる形跡を有す。然れども指は同一人の場合にあ

りても、肥瘠の時により差を生じ、また異人間にありては到底同一量たること難し。……茲に於て、別に自然物を用い、指との比率を定める必要に迫られる。印度にありては、指は麦粒を8個並べし長さとし、……この8麦長の指を量指 (Mānāṅga) と呼び、絶対的度量制の単位となす。量指は換算せられて4分の3吋となる。」(これをもとに計算すると、1肘=24指=24×3/4=18インチとなる。；筆者註)

これに対し、相対的度量制があつて、「印度の造像法にありては、像量は像の奉納主、又は造像家自身の指量を基準として作製せる度量により造建すべき規定あり。……斯くの如き造像者の実際指量より得たる指を Mātrāṅga と呼び、絶対量制の指たる Mānāṅga と区別す。而して Mānāṅga を基礎としたる量制を Aṅgamāna と呼び、訳して指量制とも称すべきか」と解説している。

J. Fleet も典拠は明らかではないが、先に紹介した論文において1肘=18インチとしている。

このように1 hasta を18インチとするものは多い。これをメートル法に換算すれば45.72 cmになる。

しかし“The Oxford English Dictionary”は cubit を「時間と場所によって異なるが、通常18~22インチ」とするから、hasta も時代と地域によって異なっていた可能性も強い。

[5-4] 以上のように hasta の長さ自身も問題となるが、hasta は「肘から中指の先までの長さ」であるから、それは両手をいっぱいに拡げた長さの1/4の長さである。腕を折り曲げて胸の前に持ってくると、鳩尾のあたりで中指が触れる。だから hasta の4倍が両手をいっぱいに拡げた長さとなるわけである。

hasta の4倍の単位は dhanu である。これは弓の長さを意味するが、これは両手をいっぱいに拡げた長さと同じ。両手をいっぱいに拡げた長さはおおよそ身長に相当する。だから dhanu は身長と等しいということになる。

先に当時のインド人の平均身長を165 cmと仮定してみたが、これを何センチと措定するかによって結果は異なる。大体どのような文化でも次項で紹介するように、長さの単位は人間の身体の各部の長さをもとにして形成されている。中国の「里」も掌を拡げて親指から中指までの長さである「尺」や、歩幅2歩分の「歩」を基準としている。これも後述することであるが、中国の長さの単位は時代が下るにつれて長くなる傾向がある。おそらくこれは体格がよくなるという傾向を反映しているのである。由旬も hasta や身長を基準にしているのであるから、そうするとこれも時代が下るにつれて長くなる傾向にあったことが容易に想像される。体格は徐々に発達し、身長も徐々に伸びたであろうからである。そうすると古代のインド人の身長は現在のインド人の身長より低かったはずである。そこで身長を165 cmと仮定してみることは妥当であると思われる。

このように1 dhanu を165 cmと仮定すると、1 hasta は41.25 cmとなる。そうすると『俱舍論記』による計算 (39.2 cm) とほぼ等しくなる。これに比して図像学から言う hasta の長さ (45.7 cm) が長いが、これは現代の1インチ=2.54 cmを基準にして計算したものである。

[6] これをもって1由旬を計算してみると、「小由旬」は16,000 hasta であるから  $16,000 \times 41.25 \text{ cm} = 660,000 \text{ cm}$ 、すなわち1由旬は6.6 kmとなる。「大由旬」は32,000 hasta であるから、その倍の13.2 kmとなる。

[7] 余談であるが、以上のような尺度は必ずしもインドに限ったものではなく、人類の歴史において普遍的なもののようなものである。度量衡の専門家によると、人類の歴史で長さの基準 [度] としてまず採用されたのは、次のようなものであったとされている (1)。

1、人体の部分の寸法による度

①腕の長さ (ひじから中指の先までの長さ)

cubitum (ローマ)、cubit (英)、hasta (インド)、肘 (中国)

または、その2倍 (左右にひろげた両手の先の間隔とも解される)

ell (英)、Elle (独)、尋・弓 (中国)

②足の踵からつま先までの長さ

pes (ローマ)、foot (英)

③親指と中指 (または小指) とを広げたときの指先の間隔

span (英)、尺 (中国)

④4本の指をならべた幅

palm (英)、つか (日本)

2、人や家畜の能力による度

①人間が歩くときの歩幅、または複歩

pace (英)、歩 (中国)、passus (ローマ)

②1日に歩くことのできる距離

rasta (ゲルマン)

③車で1日に移動できる距離

yojana (インド)

④鳴き声の聞こえる距離

ブーク (野牛、ロシア)

このように、古代インドの尺度の単位 (弓、肘、指等) は人類共通的なものであったことが知られる。

(1) 小泉袈裟勝『歴史の中の単位』(総合科学出版、1983)、同『単位のいま・むかし』(日本規格協会、1993)、同『ものさし』(「ものと人間の文化史22」法政大学出版局、1977)、平凡社『世界大百科事典』度量衡の項 (高田誠二、1985) を参照した。